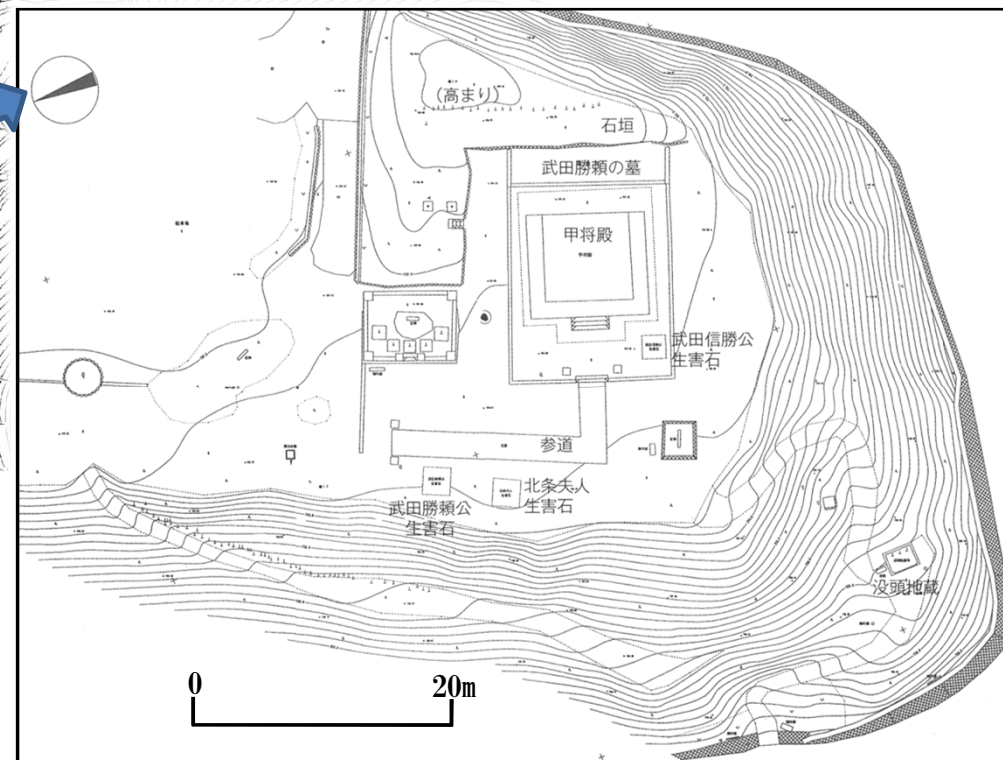




天童山景德院周辺図（左）

武田勝頼の墓周辺図（下）



山梨県指定史跡
武田勝頼の墓 調査報告

1 天童山景德院について

天童山景德院は、甲州市大和町田野に所在する、曹洞宗の寺院である。

天正10年（1582）3月11日、武田勝頼・北条夫人・嫡男信勝の親子が自害し、さらに従者も殉死し、武田家が滅亡する。翌日当地を訪れた中山広厳院第七世拈橋和尚が、亡骸を集め供養を行った。

同年7月、徳川家康が入国し、勝頼主従の追善を祈って田野一円を寺領として与え、田野寺を建立するよう武田の遺臣尾幡勘兵衛に命じた。また殉難諸士の茶湯料として別に一山を寄進、武田家の追善供養を行った。寺伝では天正16年に諸堂が落成したという。

2 県指定史跡「武田勝頼の墓」について

武田勝頼の墓は、景德院境内の南側に独立して建つ「甲将殿こうしょうでん」（御霊屋）の裏手に建立されている。南北12.4m、東西3.1mほどの区画の中に、9.3m×2.3m（現状）の基壇が設けられ、その基壇は4.8mの中央基壇、2.2mずつの右基壇・左基壇の3つに分けられる。中央基壇には3基の石塔が据えられており、中心の宝篋印塔ほうきょういんとうが勝頼、右手の五輪塔が北条夫人、左手の五輪塔が信勝の墓である。左右の基壇に据えられた石塔は、殉難者供養塔と称されている。勝頼の宝篋印塔の塔身に「二百年遠忌おんき」「安永四年」「十一世 要導ようどう」と刻まれており、安永4年（1775）に、当時の住職である第十一世・要導が二百年遠忌を修したことがわかる。

武田勝頼の墓は昭和33年6月19日に、景德院境内は昭和42年5月29日それぞれ山梨県指定の史跡に指定された。また、境内に建つ山門は天保6年（1835）再建のもので、平成7年6月22日に山梨県指定有形文化財に指定されている。

3 「武田勝頼の墓」保存修理事業について

景德院は創建以後、弘化2年（1845）、明治27年（1894）の二度の火災に遭い、諸堂を焼失している。御霊屋の裏手に建つ武田勝頼の墓も、御霊屋火災に伴う毀損、剥離が認められ、石塔が乗る基壇も全体に歪みが生じ、見た目にも傾きがわかるほどであった。

そのため景德院（住職 米山蓼應よねやま すいおう）では、平成18年度の県費補助事業として保存修理工事を行うこととした。

平成18年11月末から準備工を始め、12月からは石塔の解体に着手した。勝頼の宝篋印塔、北条夫人・信勝の五輪塔、左右の殉難者供養塔の台座より上部をすべて解体し、3つの基壇の解体を残すのみとなったところで、基壇中から経石きょうせきが多量に出土した。



勝頼塔身



北条夫人地輪



信勝地輪



武田勝頼の墓 全景

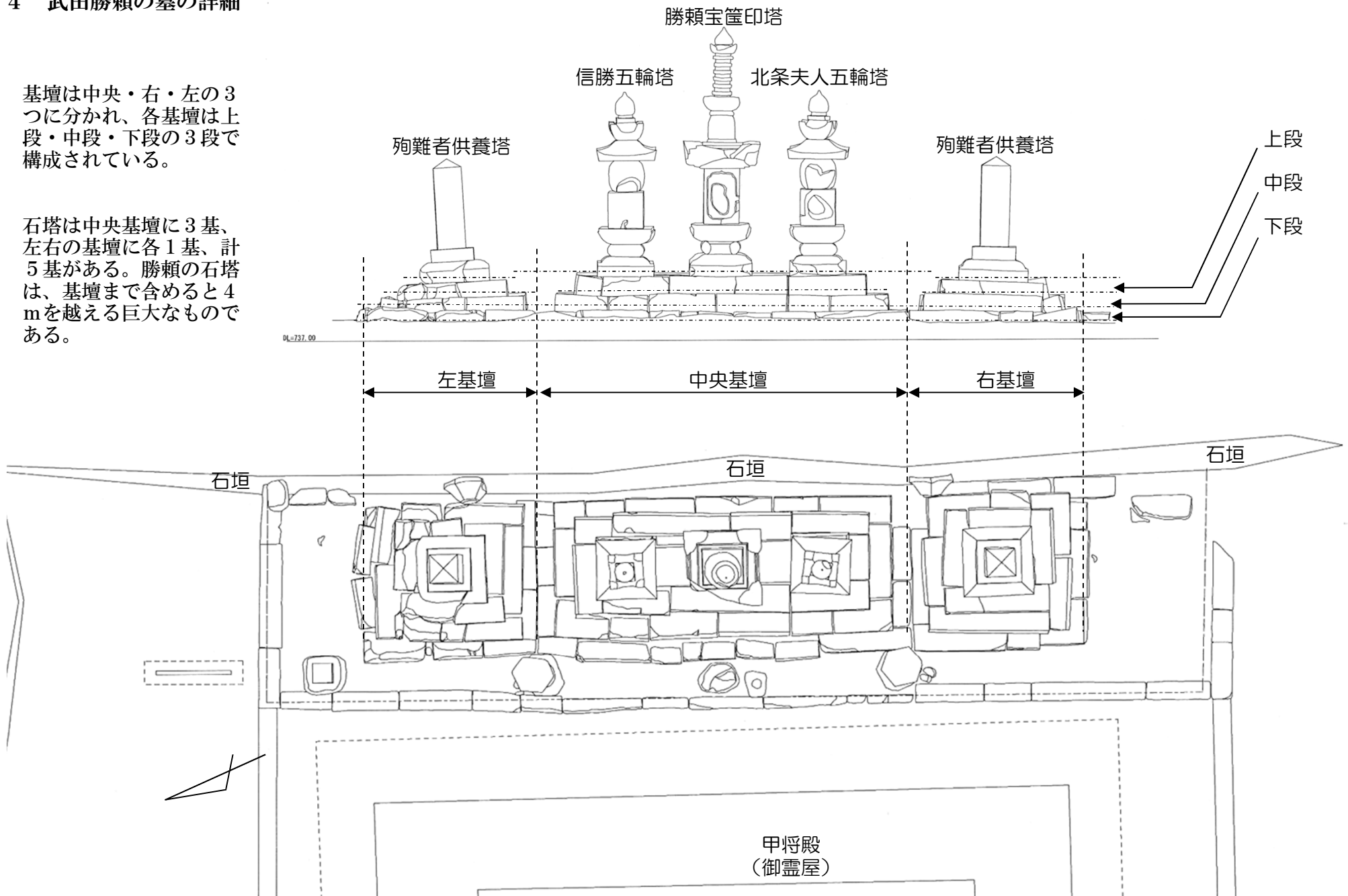


墓の傾き具合

4 武田勝頼の墓の詳細

基壇は中央・右・左の3つに分かれ、各基壇は上段・中段・下段の3段で構成されている。

石塔は中央基壇に3基、左右の基壇に各1基、計5基がある。勝頼の石塔は、基壇まで含めると4mを超える巨大なものである。



5 これまでの調査の概要について

(1) 平成18年度の調査

墓の修理に伴い石塔類を解体したところ、各基壇の内部より経石が大量に出土した。そのため、すべてを記録し番号を付けて取上げた。取上げた総数は5,415点を数える。内訳は、左基壇236点、右基壇336点、中央基壇4,843点であった。※註



(2) 平成19年度の調査

出土した経石について、洗浄、法量計測、経文の解読などの整理作業を行った。

(3) 平成20年度の調査

経石については引き続き整理作業を、墓については周辺の発掘調査を実施した。

※ その後の集計により、点数は以下の通りとなった。

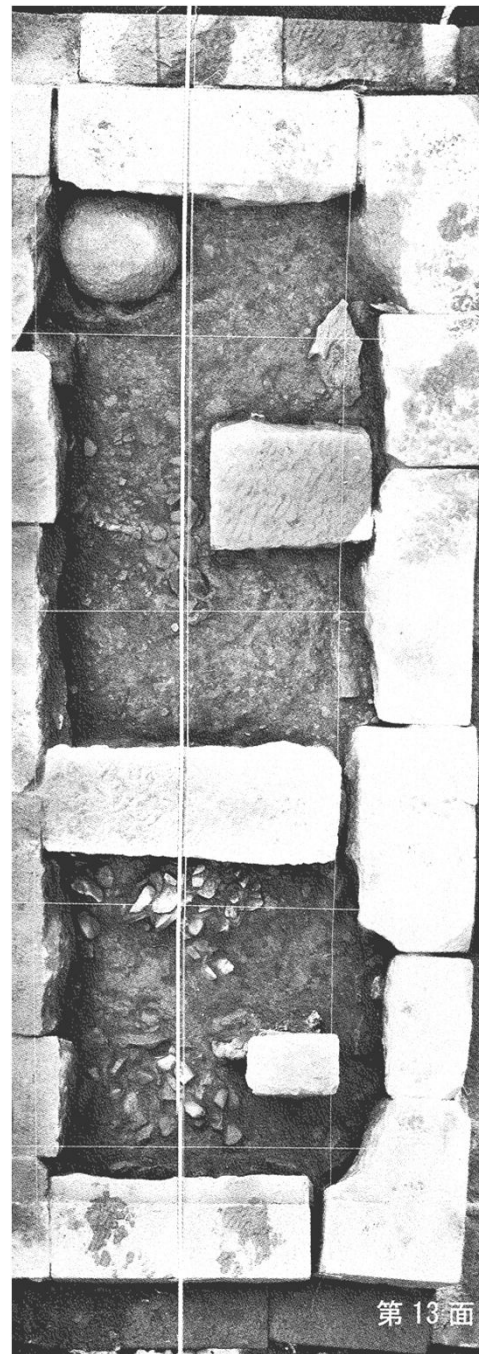
左基壇	224点
右基壇	321点
中央基壇	4,710点
その他出土	20点
計	5,275点



第7面



第11面



第13面



第16面

6 これまでにわかったこと

(1) 平成18年度の調査によりわかったこと

- ① 経石の出土により、当時の供養の方法がわかった。
- ② 右基壇出土の「戒名文字資料」により、左右の基壇に載る「殉難者供養塔」は安永9年（1780）の造営の可能性がある。
→ 勝頼の石塔に「安永4年（1775）」と銘記されているため、調査前はすべて安永4年に建立したものと考えていた。

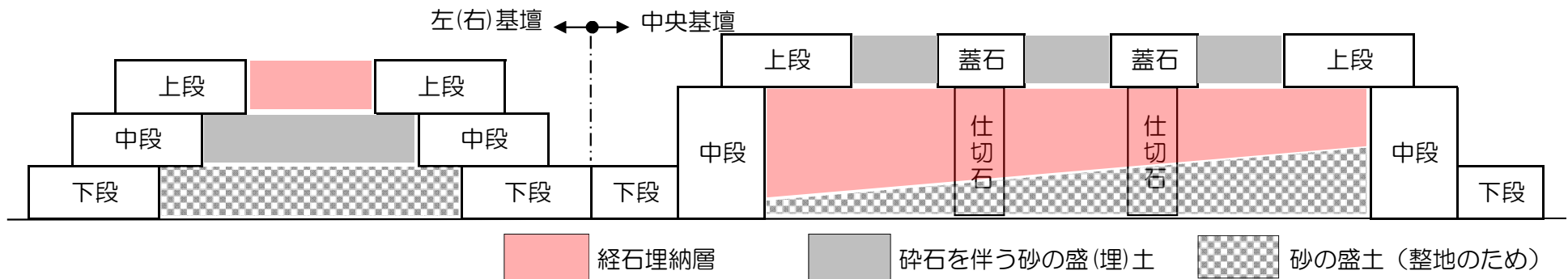


上：右基壇出土「戒名文字資料」
左：戒名文字資料の裏面
「奉天瑞書者」「安永九年」の銘



勝頼宝篋印塔の銘記
「安永四乙未歳」「三月十一日」
「二百年遠忌造立」「当山十一世要導」

- ③ 中央基壇と左右の基壇は、造営の方法（基壇の積み方）が異なる。



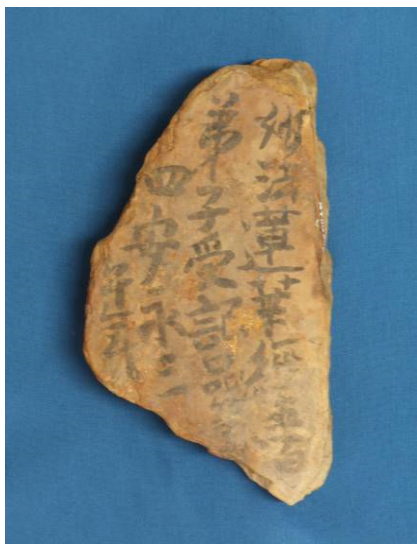
- 見かけ上、両基壇も上・中・下の3段からなるが、中央基壇は中段と下段が地面に接地し、このうち中段が経石埋納のための石室をつくっている
→ 一方、左右の基壇は、持ち送りで石を積み上げ、上段のスペースに経石を入れている。

(2) 平成19年度の調査でわかったこと

① 経石の整理作業により、書かれている經典が明らかとなった。

→ 中央基壇から出土した経石については、法華経がほぼ100%を占める。

一方、左右基壇から出土した経石については、首楞嚴神呪、開甘露門、消災陀羅尼、金剛般若波羅蜜経が書かれていることが、「戒名文字資料」から推測できる。



KY10-009 「妙法蓮華經五百／弟子受記品第八／四安永三午年」
「八月吉日／十一世要導代／書之」



KY4-062

「妙法蓮華經卷」
「安永三」
(年号は側面)



KY4-043

「大乘妙典經」③
「禪保」
「安永三甲午年
八月吉日？」



② 経石に、年号と写経者名が書かれていたものがあった。

→ 年号は「安永三年」とあり、中央基壇の石塔が完成する前年から写経を始めたことがわかった。

→ KY10-009の「要導」は、当時の住職で中心人物。

→ KY4-043の「禪保」は人物名（僧侶）と思われる。

③ 接合できた経石が多くあった。同一箇所と同じ面や上下の面の接合はもちろん、中央基壇では信勝の下から出土した経石が北条夫人の下から出土した経石が接合した例もある。

→ 343点の経石が接合し、156点にまとまった。中央基壇の経石は156点中135点で、うち14点が水平方向で離れた経石の接合である。

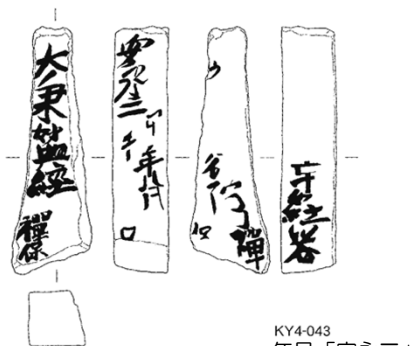
→ 別の場所で写経し、書きあがったものを一旦箱などに入れ、その後埋納したため。

→ 離れた場所から出土した経石同士が接合するのは、箱に入れたときに割れたものと思われる。

ただし、左右の基壇については、飛び越えての接合例はない。

④ 石塔類を刻んだ際に発生した多量のみかげ石の剥片は、経石として使用していない。

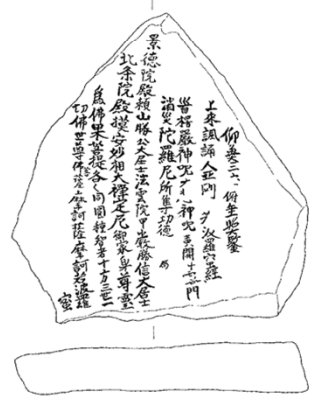
→ 割れ口が撥水するからか。



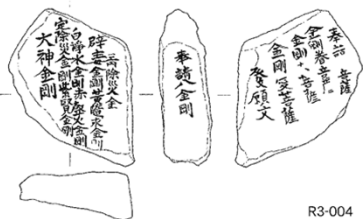
KY4-043
年号「安永三」
人名「禪保」



KY7-143
人名「鳩摩羅什」



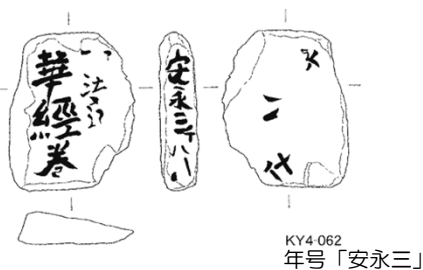
R1-001
年号「安永九」 人名「天瑞書者」



R3-004
「金剛般若波羅蜜經」



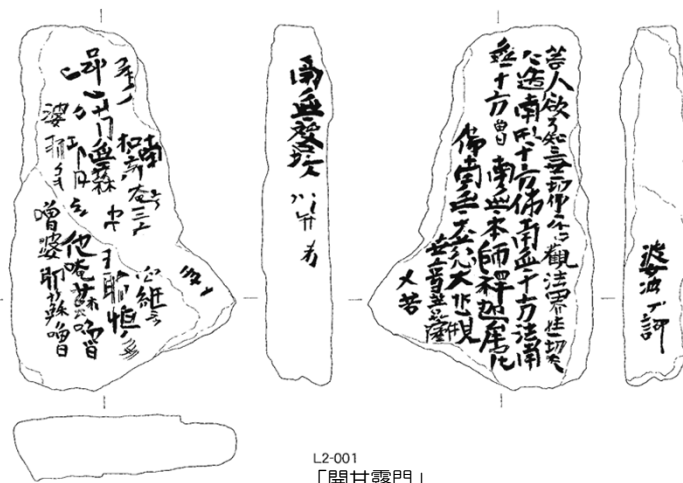
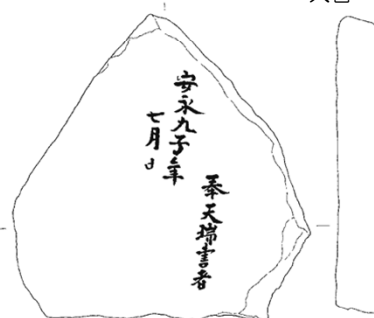
L1-087
「金剛般若波羅蜜經」



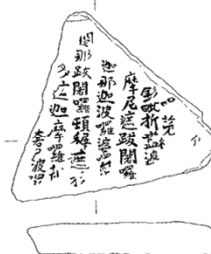
KY4-062
年号「安永三」



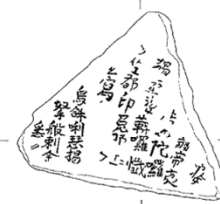
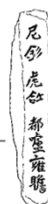
KY10-009
年号「安永三」
人名「十一世要導」



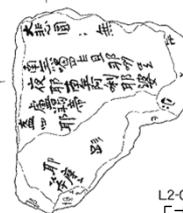
L2-001
「開甘露門」



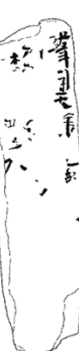
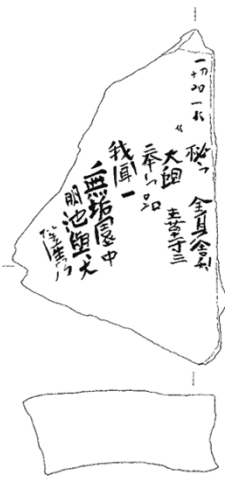
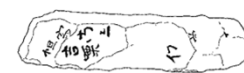
L2-045
「首楞嚴神呪」



特記經石



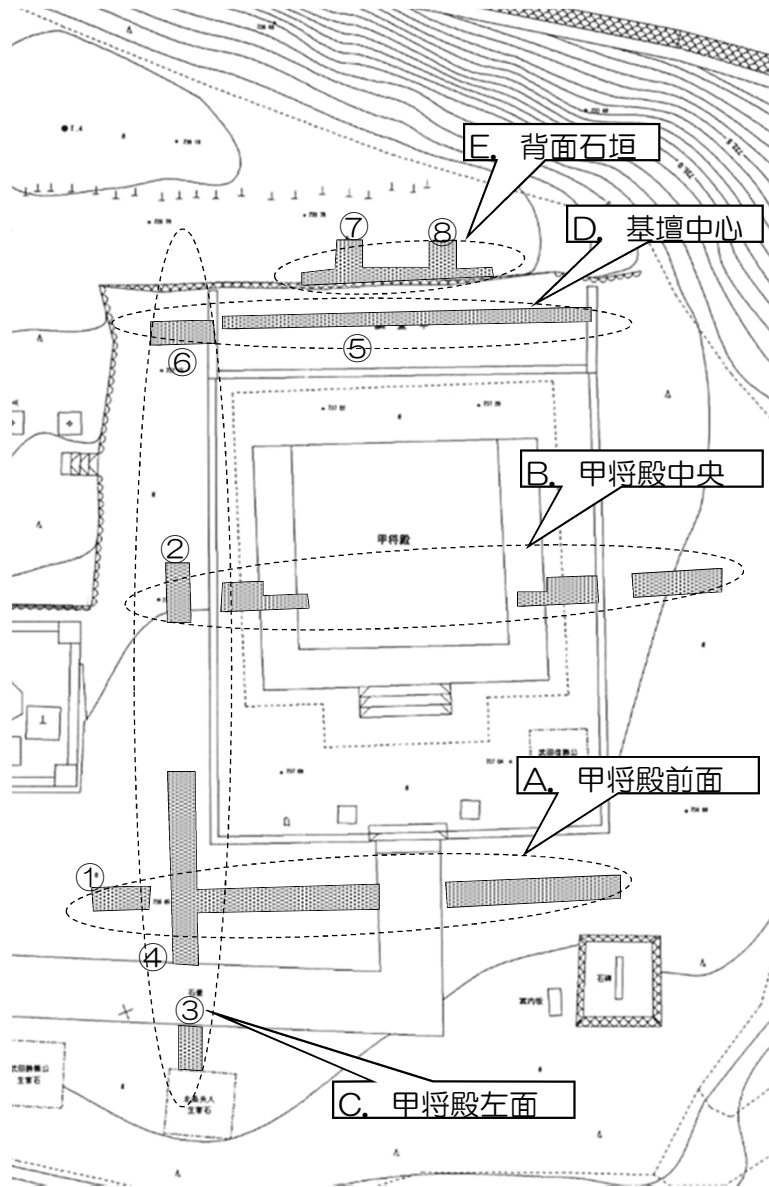
L2-049
「大悲神呪」



L2-086
「宝篋印陀羅尼」



(3) 平成20年度の調査でわかったこと



C. 甲将殿左面



① 30cmほどの表土の下に、1mほどの砂礫層がある。



② ロームのような暗黄褐色の土と、みかげ石の風化したもの（バク石）が確認された。あまり手が入っていない層と推測できる。



③ 砂礫層の上面が、左手（西）側に落ちている④ 石列が検出されたが、溝と思われる。



発掘調査箇所と区域分け

D. 基壇中心



E. 背面石垣



⑤
中央基壇は、砂と碎石による整地層。
それ以下は、1 m以上ある
砂礫層で、これも整地層と
みられる。

⑥
基壇から外れた箇所は砂礫
と砂による整地層で、1 m
掘ったところでやっと土が
でた。

⑦



⑧



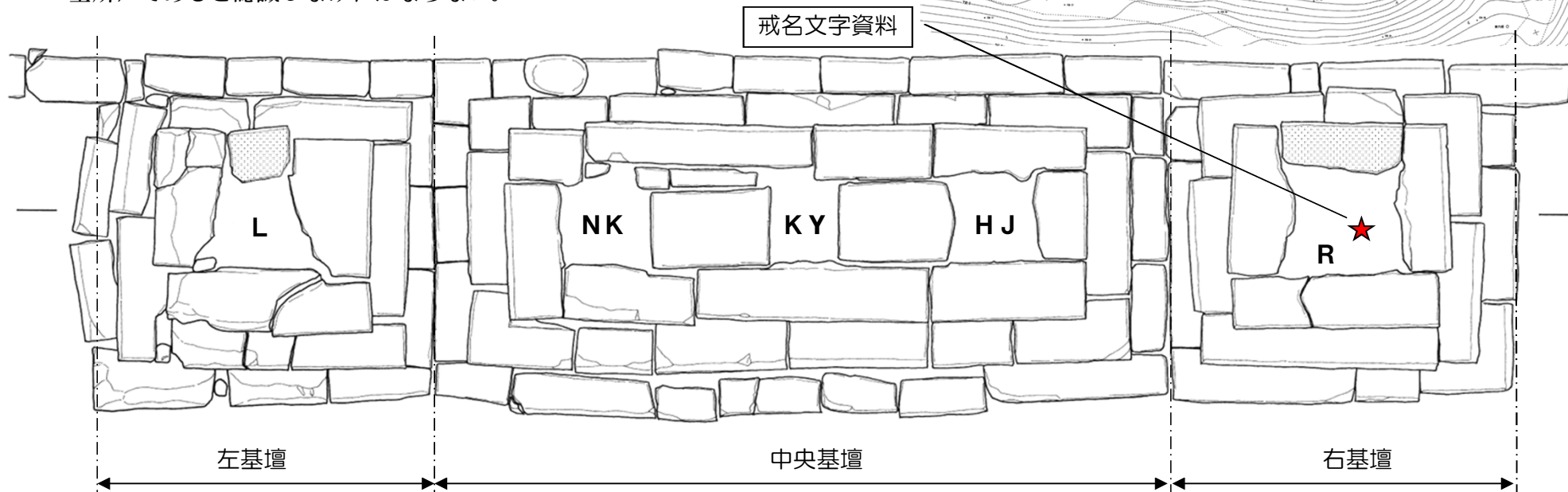
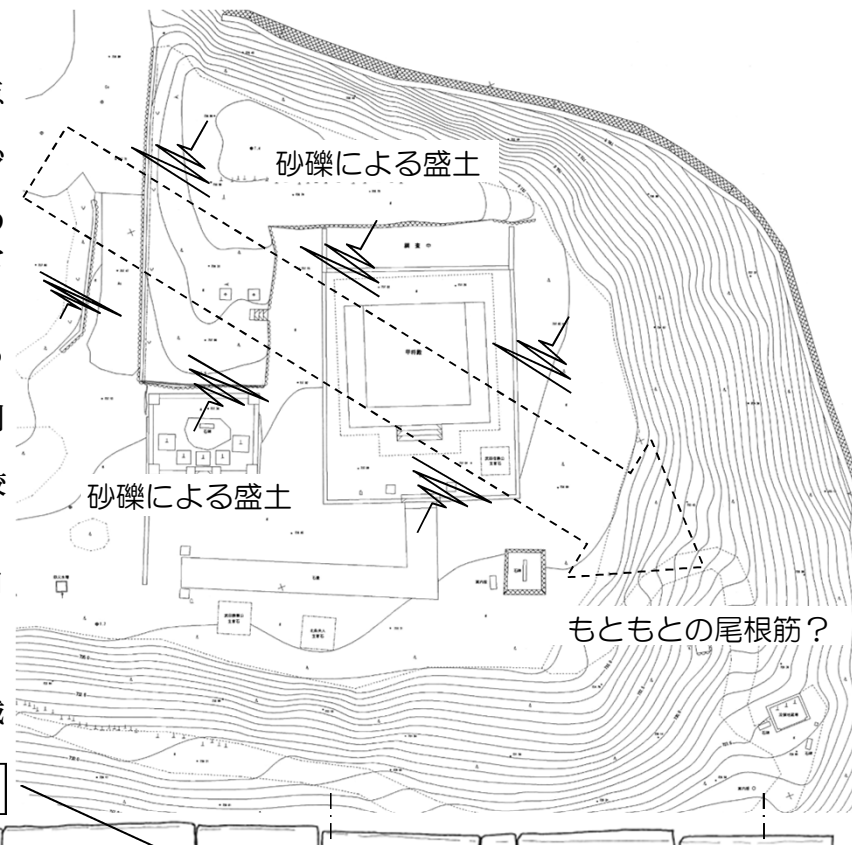
⑦ ⑧
背面石垣の奥を掘ったところ、
砂礫が続いている状況
だった。

⑤

⑥

(4) わかったことの総括

- ① 発掘調査では、甲将殿の中央からは安定した土がでていたのに対し、その他の地点からは厚い砂礫層が検出された。
このことから、かつては矢印のように走る尾根が所在し、その両側の落ち込みに砂礫を入れ、平坦な面を造成したものと考えられる。
砂礫による造成の時期は、出土品を伴わないため不明だが、背後の石垣の高まりの下部からも砂礫層が検出されていることと、その高まりを切って二百年遠忌の墓を造立しているの、遠忌を修した安永4年より古い可能性がある。
- ② 中央基壇と左右基壇の経石は、年号が入った経石・文字資料の出土により、異なる時期に埋納されたことがわかった。
経石分析においても、中央基壇のと左右基壇では写経者の筆跡が共通せず、全く別のグループであることが推測できる。
また、接合経石の存在から、写経は墓以外の場所(建物内か)で行い、埋納はまとめて比較的無造作に行われたと思われる。
- ③ 甲将殿付近の土は非常に安定しており、砂礫層が検出されなかったの、甲将殿自体は大きく移動していないものと思われる。ただし、かつての規模は不明。
- ④ 武田勝頼らを弔うために、非常に大掛かりな造成を行っていたことがわかった。
石塔は単なるモニュメントであり、造成により得られたエリアそのものが墓(墓域・墓所)であると認識しなければならない。



7 文献にみる「武田勝頼の墓」

(1) 『峡中紀行』

『峡中紀行』は、荻生徂徠が宝永3年(1706)に甲府城主柳澤吉保の命により来甲した折の紀行文で、勝頼の二百年遠忌以前の様子が判る。

「而して景德院に至る。雨もまた小さくやむ。山門南に向いぬ。門に入りて後主の廟に謁す。後主郎君夫人の影像。みな新造するもの。ただ俗観るべからず。僧の麟岳円首座。将校従死者三十三人。虞氏輩十六人。みな牌子なり。廟の前に後主うずくまり自裁する所の石二つあり。その外を竹落せり。謁し終わり籌室に詣り、住持の僧余に語る。遺墳の所在を問えば、すなわち云う。始め後主の兵を解くとき、州を閉ざし麻のように乱れる。後事を修める者なかれ。僧拈橋という者、広嚴院に在りて、之を聞き来たり赴く。既に七日を過ぎ、屍に血淋漓す。君臣わきまえず、すなわち同じく一壙に葬る。即ち今の廟の建つる処。故をもって別に窆所の所なし。(飯島訳)」

(2) 『甲斐国志』

『甲斐国志』は甲府勤番支配であった松平定能が編集した甲斐の地誌で、文化11年(1814)に成立した。

「天童山景德院 田野村 曹洞宗下総州国府台総寧寺ノ末、御朱印高七十五石余 一ニ田野寺ト称ス 当寺ハ武田勝頼落命ノ地タルニ因テ天正十年午七月 神祖御入国ノ刻ミ新規建立仰セ出被ル田野ノ郷一円ニ御寄附菩提所ト為シ給ヘリ 殉死ノ士土屋惣三ヲ始メ残リナク 位牌ヲ立テ茶湯焼香嚴密為ル可シ 之ニ仍テ初鹿野村ノ分内ニテ一所御寄附ナリ 山中広嚴院ノ七世拈橋偃因住持職ヲ命ゼラレ同十六年造立落成ス 拈橋寂シテ後無住ナリ山中ヨリ兼帯スル事殆ド五十余年 寛永中ニ及ンデ武田ノ旧臣当時幕府ニ奉仕スル者数人云々ノ事アリテ中山ヲ離末シ総寧寺ニ隸セシム」

「莊嚴頗ル備ハレリ本堂(十間六間)本尊ハ釈迦・文殊・普賢、靈屋(三間ニ四間額ハ甲将殿、勅賜紫衣僧空子ノ書)、勝頼・夫人・信勝ノ影像三軀及ビ殉死ノ輩僧二人士三十三人侍婢十六人ノ牌子ヲ列ス 開山堂(三間四間)永平道元、古開山拈橋、当開山ノ木像世次ノ位牌 東照宮及ビ御代々ノ尊牌并ビニ機山信玄ノ牌を安ンジ又珠光院無角道牛居士トアルハ尾畑景憲ノ牌ナリ 惣門(額ハ山号)三門(額ハ寺号)衆寮(八間四間)庫裡・鐘樓等ナリ」

「今ニ勝頼夫婦信勝三人ノ寿像并ニ殉死ノ士三十五人侍婢十六人ノ牌子ヲ靈屋ニ安ズ 又説ニ拈橋始メテ法名ヲ施ス時戦場ノ事ナレバ殉死ノ内ニ姓名ノ漏レタル人モ有ルベシ 拈橋ハ蚤ク広嚴院ノ席ヲ譲与シテ彼ノ地ヘ移リテ草庵ヲ営ミ住セリ サレドモ寺建立ハ未ダ就ラズ数年広嚴院ノ兼帯所トナル 寛永中ニ及ビテ離末ノ事アリ 而シテ今ノ莊嚴全ク備ハリタル趣ナレバ其ノ際ニ牌子ノ紛失セシ事モ有ルヤラン 士四十六人侍婢二十三人ト記シタル史録モアリトナン」

(3) 『勝沼古事記』

『勝沼古事記』は、甲州市勝沼町勝沼の個人宅に所蔵されている記録で、表題に「勝沼古事記」もしくは「故事記」と書かれている。この記録は、坂本勘解由直昌というものが天正10年3月の武田家滅亡に際し、再被官を好まず勝沼村に定住し、それ以来勝沼村が宿として発展していく途上にいろいろと見聞した事柄を記述し、さらにその子孫がこの記録を受け継いでいったもので、その年代の幅は天正11年から慶応元年に至るまでの長期間の記述となっている。勝頼墓についての直接の記述ではないが、安永8年(1779)の項を挙げる。

「田野山ニ而勝頼公様御法事在」

(4) 「保坂家文書」

「保坂家文書」は甲州市塩山赤尾の個人宅に所蔵されている文書・記録で、全208点が甲州市指定文化財となっている。保坂家は赤尾村の名主・長百姓を勤めており、記録は宝永5年(1708)から大正8年(1919)に及ぶが、最も特徴的なのは延享2年(1745)から大正8年にわたり、同家の歴代頭首によって書き継がれてきた129冊の日記である。二百年遠忌が安永8年に執り行われたことを示す資料である。

「一 武田公様田野御法事式百年御忌、三月八日より十四日迄と被仰出候所、御停止ニ付延引、十五日より廿一日迄御法要有之候事、西の丸様御遠行十四日迄御停止ニ候事」

「一 御焼香ニ罷出候、去年秋為知之御使僧来ル事、市兵衛殿同道候」

「三月十六日参詣、はさみ箱ぞうり取候事、上下ニ而御焼香候、はかま羽折ニ而玄関迄参ル事、自分当日歸り、市兵衛殿詰居詰番勤被申、喜三郎殿も被参、市兵衛殿替被申廿一日迄詰居被申候事、■々數御佛事御物入御用多沙汰ニ候事」

8 いくつかの仮説

(1) 景德院の規模

向嶽寺では天明4年(1784)に開山抜隊禅師の四百年遠忌を修しているが、このときの様子が『向嶽寺史』(関口貞通著)に記されている。
「(天明元年)六月末から近隣五ヶ村から一國勸進がはじめられた。役僧、伴僧、それに草履取などを伴ってのものしく行われるのである。」
「本番の遠忌は天明四年の二月十四日から二十日までの七日間にわたっておこなわれ、石和代官所から役人が出て警護に当たるが、五ヶ村も分担で境内警護の人数を出した。」
「七日間、一日ずつ交代で山内の和尚が焼香し、それに両班の僧侶が相伴する。なお諷経(ふぎん：声をあげて経を唱えること)に近隣の禅寺の僧侶やお供が来山する。このときは恵林寺(甲州市塩山小屋敷)から五十七人、清白寺(山梨市三ヶ所)から九人、景德院から五十五人、計百二十一人の僧侶、これに侍その他の供まで入れると総計二百六十人というおびただしい数にのぼる。」
⇒⇒⇒大寺院だった可能性

(2) 経石埋納の違いからみる中央基壇と左右基壇の関係

中央基壇・・・「安永3年」銘の経石、ほぼ100%法華経を写経している
左右基壇・・・「安永9年」銘の戒名文字資料、法華経以外の經典を写経している

⇒⇒⇒基壇の造営時期が異なるか？



- ◆ 中央基壇と左右基壇の造営は同時期と思われる、経石埋納の時期だけが異なる。
- ◆ 理由として、中央基壇と左右基壇には一体感があり、左右基壇には経石を後入れできる工夫が見られる(14ページ参照)。

(3) 勝頼宝篋印塔、北条夫人五輪塔、信勝五輪塔の並び方

現状・・・左から、信勝五輪塔、勝頼宝篋印塔、北条夫人五輪塔

当初・・・左から、勝頼宝篋印塔、北条夫人五輪塔、信勝五輪塔か？

《理由1》

中央基壇における各石塔下の埋納経石数(総点数4,710点のうち)

NK(信勝)・・・2,498点(53.03%)、KY(勝頼)・・・1,451点(30.81%)、HJ(北条夫人)・・・761点(16.16%)

◆ 最も篤く供養すべき対象が勝頼であれば、経石も多いのではないか？

◆ 経石埋納の石室の仕切り方が、大きな宝篋印塔1基、小さな五輪塔2基という割合に比例する(7ページ参照)。

《理由2》

各石塔台座の、火災による破損具合



(左基壇)



(中央基壇・勝頼)



(中央基壇・北条夫人)



(中央基壇・信勝)



(右基壇)

破損大

破損小

9 まとめ

(1) 墓の建立について

- ・墓は3つの基壇（中央基壇、右基壇、左基壇）からなるが、中央基壇と左右基壇では造り方が異なる。経石の埋納方法も異なるが、埋納した時期に起因すると思われる、墓そのものはすべて安永4年に完成したものと思われる。
- ⇒⇒ 基壇には一体感があるが構造が違う。それは、中央基壇内の経石は墓の造営工事に間に合ったが、左右基壇内の経石は、完成後でも埋納できるよう、基壇の構造を変える必要があったからか？
- ・当初、中央基壇上の供養塔の並び方は、左から勝頼—北条夫人—信勝の順だったのではないか？
- ⇒⇒ 今のところ状況証拠しかない。現在のようなシンメトリーに据え変えたのは、明治の火災後か？
- ・墓を建立するに当たり、近くの沢から多量の砂礫を運び入れ、大造成を行い土地を確保した。
- ⇒⇒ 砂礫層の中から遺物がまったく出土しないのは、沢から直接運び入れたためと考えられる。また、砂礫層内の礫石の種類は、近くの沢の礫石とよく似ており、中央基壇出土の経石とも似ている。

(2) 二百年遠忌について

- ・勝頼供養塔の銘にある「安永4年」ではなく、文献で判明した「安永8年」に行われた。
- ⇒⇒ 景德院は過去2度の火災により記録を焼失している。そのため、勝頼墓の地輪の銘による「安永4年」が通説となっていた。
- ・法要は7日間にわたり営まれたが、当時としては一般的な法要であった。
- ⇒⇒ 17ページの「向嶽寺開山四百年遠忌」も7日間行われた。

(3) その他

- ・遺骨の所在は、荻生徂徠によれば、甲将殿（御霊屋）の直下に大きな穴があり、そこに埋められている可能性がある。
- ⇒⇒ 平成20年度の発掘調査の際、甲将殿の真下を一部掘り下げたが、土層の確認だけで終わった。



戒名文字資料 R1-001 銘文

表面

「仰冀三宝俯垂照鑒」
「上来諷誦金剛般若波羅蜜經」
「首楞嚴神呪大悲神呪黃開甘露門」
「消災陀羅尼所集功德者為」
「景德院殿頼山勝公大居士法雲院甲巖勝信大居士」
「北条院殿模安妙相大禪尼御家臣尊靈」
「為佛果菩提各々同圓種智者十方三世一」
「切佛世尊佛菩薩摩訶薩摩訶若波羅蜜」

裏面

「奉天瑞書者」
「安永九子年」
「七月日」

略年表

元号	年	西暦	
天文	15	(1546)	勝頼、信玄の第四子として生まれる
天正	1	(1573)	家督を継ぐ
	3	(1575)	長篠の合戦に大敗（5月）
	9	(1581)	新府城築城に着手する（1月ころ） 躰躰ヶ崎の館から新府城に移る（12月ころ）
	10	(1582)	新府城を捨て、岩殿城へ向かう（3月） 大善寺へ一泊し、理慶尼とあう 田野の地で自刃、武田家滅亡する（3月11日）
（景德院関係）			
天正	10	(1582)	家康の命により田野寺が建立され、住職に拈橋が入る
	16	(1588)	本堂、庫裏、御霊屋、山門など、伽藍がほぼ完成する
	19	(1591)	拈橋遷化し、以後、広厳院（笛吹市一宮町）の兼帯となる
寛永	8	(1631)	広厳院を離れ、総寧寺末となる 総寧寺から勝国を二世に迎える
宝永	3	(1706)	荻生徂徠、景德院を訪れ、『峡中紀行』に記す
安永	3	(1774)	勝頼二百年遠忌のため、経石の写経を始める（8月）
	4	(1775)	勝頼らの供養塔が建つ（3月）
	8	(1779)	勝頼二百年遠忌が営まれる（3月15日～21日） 山門が落慶する（3月）
	9	(1780)	左右の基壇内に経石、戒名文字資料が埋納される（7月?）
天明	4	(1784)	向嶽寺開山四百年遠忌に、景德院から55人が派遣される
文化	11	(1814)	『甲斐国志』編纂される
弘化	2	(1845)	景德院、火災に遭う
明治	27	(1894)	景德院、火災に遭う
昭和	33	(1958)	武田勝頼の墓、県史跡に指定される（6月19日）
	42	(1967)	景德院境内、県史跡に指定される（5月29日）
平成	18	(2006)	勝頼の墓の保存修理着手、経石出土により緊急調査、墓は仮安置
	19	(2007)	経石の整理作業を始める 景德院檀家総代会が中心となり「平成の新経石」を募集する
	20	(2008)	勝頼の墓の周辺について発掘調査を行う
	21	(2009)	勝頼の墓保存修理完了、経石埋納式を執り行う（11月20日）
	22	(2010)	勝頼の墓落慶法要を営む（4月25日）



